

徳島大学 大学院社会産業理工学研究部 理工学域光応用系光機能材料分野
原口雅宣教授より

原口教授は今年度「常三島地区研究機器広報プロジェクト」の受入をご担当していらっしゃいます。

もし壁にぶつかったときは、是非以下の4ヶ条を心がけてみてください。

1. 初めてのことはうまくいなくて当然

やったことのないことは上手にできなくて当然。その上で、どうやったらより良い結果を生めるのかを考える姿勢で臨むのが大切です。

2. チームで作った成果物が評価対象である

何か失敗をしたとき、できなかった自分がどう評価されるのかを気にして落ち込むことはありませんか？評価対象はあくまでもチームで作った最終成果物です。より良い成果物を生み出すための失敗は一向に構わないのです。

3. 面倒くさくても作業分解

インターンシップの最終的なゴールが具体的にイメージ出来ているでしょうか？ゴールに至るまでに何をするのか、最終目標だけではなく中間目標、小さな目標まで明確になると、自ずとゴールへのプロセスが見えてきます。地道に小さな目標を確実に達成していくことが一番の近道です。

4. チームに貢献すべし

どんな小さな役でもいいのでチームの中で何らかの役割を持って活動してください。必ずチーム全体のパフォーマンスは上がります。

インターンシップは授業とは違います。言わば、己を磨くための道場のようなもの。こうすれば必ず成功する、という方法はありません。地道にやっていくしかないのです。しかし、自分の仕事を1人でやりきる必要はありません。困った時には周りの人を頼りながら、とにかく邁進してください。絶対に何かを得てやろうというフロンティアスピリッツを持って、果敢に取り組んでください。

徳島大学総務部大学改革・評価課
橋川洋一郎課長より

橋川課長は、昨年度まで地域創生課の課長を務められていました。昨年度の1期生の活動をずっと気にかけていただき、見守り続けてくださっていました。

1. 主催者の視点

昨年度の今頃、現場に入り始めたインターン生がつまづいたり、落ち込んだりしているのを見て、「しめしめ予定通りだ」と思っていました。学生のうちに、自分で考えて失敗しながら経験をしてほしいと思います。自分で考えて、失敗をして、失敗した後に褒められて伸びるのが理想です。そして、忘れないでほしいのが、失敗をする自分たちを周りで見てくれる人がいることです。成長を見守ってくれる人、失敗の後始末をしてくれる人、いろんな人たちがいるので、主体的に臆することなくどんどん挑戦してほしいと思います。

2. インターン生の立ち位置

また、一人のインターン生(学生)であり、企業人でもあるので、自分の立場を考えたいうえで行動してほしいと思います。学生の行動によって、学生自身や、関わってくれている企業、大学の印象が左右されます。インターン活動中は様々な事が起こると思いますが、まずは、関わってくださっている企業の方やメンバーに対する感謝の気持ちを忘れずにいてください。

3. インターンシップの場

インターンシップでは失敗する事を恐れずに、ミッション達成に向けて成果にとことんこだわり、邁進して行ってください。その結果、ご自身の経験や糧となるでしょう。

もし、失敗したときは、落ち込むのは1~2日までにして、なぜそうなったのか分析し、原因だけを記憶して学びとしてほしいと思います。ぜひベストを尽くして経験し、学んで行ってください。

編集後記

本格的にインターンシップが始まり、「思ったより難しい」「何故かうまくいかない」といった壁にぶつかっていませんか？今回インタビューをする中で、1期生は自分のできないこと、したことがないことに挑戦して、壁にぶつかっていましたが、1期生は「とにかくわからないけどやってみる」「出来る限りより良いものを作る」という意気込みでインターンシップに最後まで取り組んでいることがわかりました。つまづいてどうしようもないと思った時、なんで上手くいかないかわからない時、相談したいことがあればいつでも1期生を呼んでください！

このニュースレターを読んで、1期生、2期生と話してみたい、相談にのってほしい…と思った方は、いつでも常三島キャンパスの地域創生・国際交流会館3階の事務所を訪ねてきてくださいね♪
電話:088-656-9885 FAX:088-656-9880
e-mail:coc-plus@ml.tokushima-u.ac.jp

NEWSLETTER

文部科学省 地(知)の拠点 Presented By 1期生

インターンシップ 本格活動実施中!



5月
インターンシップ
フェアの様子



7月
事前研修の様子



8月~現在
活動実施中

いまここ

6月

エントリー

7月

事前研修

8月

インターン開始

9月

10月

中間報告会

11月 12月 1月

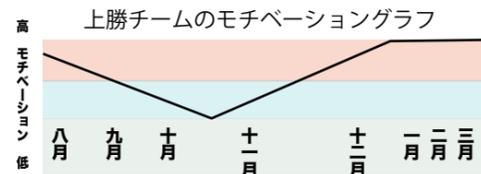
最終報告会
振り返り会

教職員 Message

「実践力養成型インターンシップを見守ってくれている教職員の方に聞いてきました！」

編集後記

平成29年度実践力養成型インターンシップに
取り組んでいる2期生は54名。
ニュースレター第2弾は、1期生4名と教職員2名から、
インターンシップに取り組む2期生にメッセージをお届けします！



- ① 現地調査1回目
- ② 現地調査2回目
- ③ 現地調査3回目
- ④ 現地調査4回目
- ⑤ 一斉ヒアリング調査
- ⑥ リーフレットまとめ

- ① 事前視察
- ② 有効的なかやぶき民家の活用法を探るため地元住民へのヒアリングを実施。
- ③ 有効的なかやぶき民家の活用法として「集落の課題を解決するための活用法」を考察した結果まずは集落の困りごとを調べる必要があることに気づく。
- ④ 受け入れ先にプロジェクト変更を提案・実施。一斉ヒアリング調査のため他サークルから人を集める。インターン生でヒアリングの講習会を参加者に実施。
- ⑤ 八重地地域住民全員にヒアリングを実施。
- ⑥ ヒアリングでわかった困りごとをリーフレットにまとめ。



——インターンシップが進んでいく中で感じたつまづきはなんでしたか？

久保：リーダーとしてチームを引っ張らねばと思ってたけど、メンバーのミーティング出席率と足並みがなかなか揃わず、仕事が割り振れなくて、一人で仕事を抱え込んでました。

篠原：何個もアイデアを出しているのに、中々通らなくて…なぜダメなのか分からず、目的を見失いかけてました。①～③

——なるほど。仕事の割り振りという<役割分担について>当時どのように感じていましたか？

久保：『リーダーとして**チームが見えていない**』と指摘を受けてからは、思い切って篠原さんに苦手なスケジュールを組んでもらうようにしましたね。④

久保：それから、日常会話もできないのにメンバーのことを知るわけがない、プロジェクトの話なんかできるわけがないと気付いて、会話を心がけるようになりました。

篠原：プロジェクトさえ完遂できたら仲良しこよしは必要ないと思いましたが、それぞれの得意分野を知る上では必要でした。適材適所がわかれば『**私はこれができるので他のできるところはお願いします**』って言えるようになりました。

——それでは見失いかけていたという<目的の見出し方について>はどうですか？

篠原：①から③で実際に住民の皆さんにお会いして意識が変わりました。このプロジェクトはそもそも**上勝町の住民のためにやっている**、ということを見失いかけて、改めてみんなで確認して定めてからは迷わなくなりました。④



——いま当時のことを振り返ったときに<役割分担について>こうしておけばよかったと思うことはありますか？

久保：自分のキャパと、できる事とできない事を正しく把握して、仕事を分担することが大事だったんだと思います。それぞれの**特性を理解し、補い合った**から最後、求められたものを作れたんだと思っています。

——<目的の見出し方について>こうしておけばよかったと思うことは？

篠原：**関わる人全員の話**を聞くべきでした。当然ですけど、それぞれご所属や立場によって物を見る視点が違うんですね。当時の私たちにはそこへの気付きがなかったです。③

久保：状況をもっと俯瞰して、色々な話を踏まえてから考えられたら、なおよかったなと思います。

——<役割分担について>いま役に立っているということはあるですか？

久保：いま参画しているプロジェクトでは**よりよい成果を生むために**やってる。そのためには**誰と誰を組み合わせるか**を考えるようになりましたね。

——<目的の見出し方について>いま役に立っているということはある？

久保：私は関係者で目標と、そのためにすることを何度も見直して、自分たちの解釈をきちんと言葉にして共有して、ズレがないか確認するようになりました。

篠原：プロジェクトを完遂するっていう**チームメンバーで同じ意識**を持つとスムーズにことが運ぶなと思います。

久保：きっと何か気づきがあると思うので、2期生の子たちに一度1期生、COCプラスの方に話をしに来てほしいと思います。



上勝学舎インターンシップではプロジェクトを進める上で必要だと思ったこと、自分たちにできる最大限のことを最後まで粘って自分たちが納得できるまで活動を続けました。

プロジェクト

八重地集落住民へのヒアリング調査などを通して、集落にあるかやぶき民家の有効的な活用方法を提案せよ！

↓
八重地集落住民の困りごと（ニーズ）調査をする！

上勝学舎テーマ

プロジェクト完遂のための姿勢とチーム作り



工学部
4年
久保文乃



総合科学部
4年
篠原諒子



工学部
3年
井上拓磨



工学部
4年
幡地智彦

QLiP インターンシップでは決められたスケジュールの中でより良いものを受け入れ先に提出するべく、時間の許す限り何度も何度も調整し自分たちが納得でき、子供達やQLiPに関わる人たちに喜んでもらえるものを作りあげました。

授業班プロジェクト

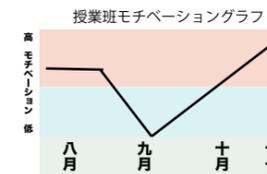
世界のプログラミング教育をリサーチし、実際に授業を実施せよ！

イベント班プロジェクト

小中学生に「プログラミングは面白い」を伝えるイベントを実施せよ！

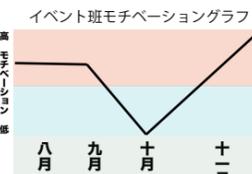
QLiP テーマ

時間がない！やり直し！を乗り越えて



- ① 先進国事例調査
- ② カリキュラム提案
- ③ 子供達に授業実施2回
- ④ 企業内で報告会

- 授業班 井上
- ① 海外のプログラミング教育における事前調査。
 - ② 調査をもとに作った模擬授業を実施。
 - ③ 実際に子供達に授業を行う。
 - ④ 企業内で報告会実施。



- I 事前研修
- II アンケート実施
- III イベントの企画・広報・準備
- IV イベント実施

- イベント班 幡地
- I イベントに参加し事前調査。
 - II プログラミングの認知度アンケートを小・中学生に実施。
 - III アンケートで得た結果をもとにイベント企画。
 - IV イベントを実施。報告書まとめ。



——インターンシップが進んでいく中で感じたつまづきはなんでしたか？

井上：自分は授業班の方なんですけど、提案の際、やったことがない分、容量のことまで考えられてなくて、授業用のパソコンに対応せず、1週間でもまた新しい内容を作り直しをしたのが結構大変で、心が折れましたね。②
幡地：僕のつまづきは、アンケート実施が10月上旬で終わらなかったことですね。作ったことがない分、自分がどこまでできるのかを把握してなくて、思っていたよりもアンケート作成に時間がかかり、実施と集計の遅れにつながってしまいました。②

——なるほど。タイトなスケジュールの中でやりきるスケジュール管理について>当時どのように感じていましたか？

井上：くそ～とは思ってたんですけど、でも**子どもたちのために**と考えたら、もうちょっと頑張ってみるか!! って士気が上がりましたね。②～③

幡地：僕はもう、**ギリギリになったのは自業自得だよな**、と腹をくくってました。追い込みをした**1週間は普通に授業のある1週間だったので、徹夜もしました**。②

——でも、「ここまでしかできませんでした。」と諦めて提出することもできたんですよね。それをしなかったのはなぜですか？

幡地：それは『**やらないきゃ**』って気持ちと、あと、いざ作業しているといろんな機能をつけたくなるんですよ。②

井上：大枠を成績でいう可のレベルまでは作っておいて、時間が許す限りできるだけ、良とか優に近づけていくというような**はじめに最後までざっくり作って、精度を高めていく**という進め方をしていました。でも、時々この部分だけができていないみたいなのが生まれるので、細かいところを詰めていくと同時に、**全体を俯瞰して見る**機会も必要だと思いました。②～③

——<スケジュール管理について>メンバーと、どんな風にプロジェクトを進めていたのですか？

幡地：とにかくよく相談してました。メンバーと2日に1回は会ってミーティングしてましたね。

井上：僕はミーティングを優先することが普通だと思ってました。**授業、バイト、サークル、どれも大事**で参加は当然。僕の優先度の一番は授業なんですけど、どれも同じぐらいで時間をやりくりして参加した。②～④

幡地：決めないといけないことが出てきて、それに対して『**これ決めんと先に進めないよ**』って納得しあってプロジェクトを進めてました。③

井上：大変な苦労も多かったけど、**子供たちのため**とか**QLiPさんのため**とか考えることが、やる気につながったのかなと思います。QLiPさんに子供たちのため、QLiPさんのためと思わせてくれるように接してもらったからだと思います。



——インターンシップをやりきったことで今役に立っていることはありますか？

幡地：**いろいろな価値観を持つ大人との接し方**は学べたかな。**つながり**も作ることができた。職業観、社会常識、意見のまとめ方、仕事内容以外にも付随することも含めてすべて学べたって感じです。あと、モチベーション回復方法も。**やりたくない仕事もやる＝自分で理由をみつけてやる**ってことですね。

井上：自分が思っていたのとは違う**新しい、知らない道へ進んでいける**やり方、考え方など内容が学べたインターンでした。